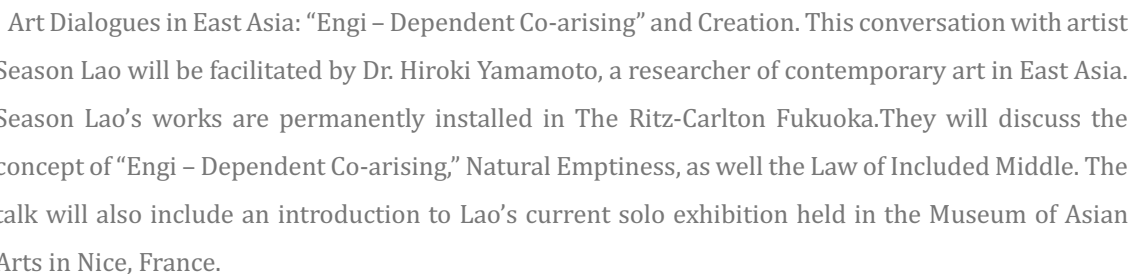


Date : 2023.9.24 15:30~14:30





**ラオ:** 現在開催中のフランスの美術館での個展にある作品から紹介します。丹下健三氏が設計したニース国立東洋美術館内の一ヶ所にガラスの空間があります。屋内と屋外を接続する「縁側」のようなその空間に＜虚室・生白＞インスタレーションを設置しました。自然の営みにより寸断された倒木を周りの景色と一緒に見立てました。匿名の人物を切り株に座らせ、そして空間から霧を発生させます。同時に芸術における主体と客体の関係を考察します。

**山本:** インスタレーションの空間を西洋、東洋と区別する考えはありませんが、ラオさんの詰め込まずに余白を生かし、そちらに重点を置く考えは東洋的に感じます。

**ラオ:** 余白、虚空を目指す東洋思想では無限の世界まで繋がることがあると考えられます。西洋では余白のことをネガティブスペースとも呼びます。

**山本:** 余白が、ネガティブスペースと訳されるのは、示唆的だと思います。私もイギリスの教育が長かったので分かる部分もありますが、どうしてもネガティブというのはポジティブに対して、ヒエラルキーの差がありますよね。ポジティブ、つまり「有る」の方が優位で、ネガティブ、余白というのは、なぜか格下のような、ヒエラルキーの構造になるのが良くないような気がします。

ラオ: 現在、私たちの普遍的な世界認識は、ヨーロッパの自然科学理論から出来上がったものです。観察と実験に基づく自然科学は実証主義、ポジティビズム (positivism) を指しています。「事實的」の意味を含めたポジティビズム、ポジティブに対し、無／余白は消極的な意味、ネガティブと思われる二項対立的な考え方です。しかし、実証主義は人間が世界を知る唯一の手段ではありません。

山本: ラオさんの場合はそういうヒエラルキーのようなものを作らない形で思考が進んでいるように思います。それは、僕が考えているエコロジーの考え方において重要だと思います。



KYOSHITSU SHOHAKU – An Empty Room Turns White For Enlightenment Season Lao exhibition – The Asian Art Museum in Nice

(Une pièce vide devient blanche pour l'illumination par Season Lao. Musée des Arts Asiatiques de Nice, France) 13.5 ~ 26.11 2023

## 縁起

山本: ラオさんの活動、作品は今抽象的なレベルにとどまっているような気がしますが、それがいい悪いではなくて、また先ほど、無限とおっしゃっていましたが、ラオさんの活動や作品の中で、無限は関係ありますか。

ラオ: 私たちがいる世界は表象世界であり、表象作用によって構成されています。カントの言葉では「現象界」と呼ばれています。表象作用とは、例えば近代意識構造などが該当します。芸術作品も表象作用の下にある概念化された対象として理解されています。

「無限」とは表象世界を越えた境地であり、真の芸術は私たちを表象世界から連れ出し、「外部」世界を垣間見れることを可能にしたいと思います。私の活動は、感応がありながら、能動的な働きかけで有形化することになります。

私の平面作品から紹介します。作品の源は自然現象との邂逅であり、私は「縁起」と呼んでいます。こういった水気があがる瞬間において、此方と彼方という相反する概念が消え去り、自

分がいる場こそが虚像となり、あるいは自分も虚像の一部となります。自然現象である霧、雪の「余白」の流動によって、虚実両方とも成り立つ瞬間、心から遠くまで「無限」に思いを馳せます。

**山本:** それはすごく面白いと思います。プランを決めずに、縁起や偶然性のようなものに身を委ねていくことは、ラオさんの制作プロセスの中で、重要な要素になっていると思います。



Iwakuni, Yamaguchi, Japan 2023 | SEASON LAO | Photography on Kozo Paper 200×64 cm

## エコロジー

**山本:** 僕はコロナ禍の際に、エコロジーについて考えていました。

東アジアというものは、地域的にはある程度確定できるけれども、僕は現実には実体を持たないものだと思っています。そういった東洋と言われる地域の中で発達した考え、つまり、二元論というものを作らない、主体と客体をはっきりと規定しない思想が、どういうエコロジカルな可能性を持つかということを考えました。

自然科学は、自然を客体とすることで科学的合理性の対象とし、実験をして、自然を改変可能なものとして、どんどん搾取してきた側面があります。ベーコンなどは、実験というのは自然を拷問にかけて真実を吐かせることだと言っていました。

当時は、人間にとって、自然のスケールはあまりに大きかったので、自然を無限なものとして、どんどん搾取した結果、様々な問題が起こっています。これを考えた時に、そういった二項対立ではない思想から出てきている絵画や平面作品が、見る人にとって、何か新しい、ある種のエコロジカルな思想が入ってくるきっかけになるような感覚で僕は捉えていたんです。

**ラオ:** コロナ禍は、世界規模で今までの人間活動に打撃を与えました。逆説的に言えば、人間と自然の関係性を見直すきっかけでもあると思います。

当時、京都に拠点を構えた私は文化財寺院で、自然現象に感応した着想から、ある実験をしました。仏教の浄土思想を象徴する庭で、此岸と彼岸の間に白霧が生じる、《可視・不可視》イ



インスタレーションでした。人間と物象の位相にある主体／客体、外部性／内面性との境界を越えることを試みました。

そういった主客未分の状態を、私は「容中律」と呼ぶのも相応しいと思います。このインスタレーションは最初に山本さんが東洋的に感じるとおっしゃった《虚室・生白》の原型とも言えます。東洋思想では「天人合一」の言葉がありますが、人間と自然はお互いに含まれるという考えです。

**山本:** 主体と客体がはっきりと分かれてない状態のことを指して、自然というものの経験は、西田幾多郎が本来的には純粹経験だと言っていたのを今思い出しました。ラオさんが霧、雪の中で経験したことは確かに、純粹経験だと思いました。

今のお話からは二項対立的なものを解体していく、二項対立に囚われない思想はラオさんの制作で重要な要素に感じます。また鑑賞者、いわゆる主体的なものが作品の一部になることは、主体と客体、エコロジーの提供で重要なことだと思います。



Mt. Asama, Nagano, Japan 2024 | SEASON LAO | Photography on Kozo Paper 180 × 72 cm

**山本浩貴（やまもと・ひろき）** 文化研究者。1986年千葉県生まれ。実践女子大学文学部美学美術史学科准教授。一橋大学社会学部卒業後、ロンドン芸術大学にて修士号・博士号取得。2013～2018年、ロンドン芸術大学トランスナショナルアート研究センター博士研究員。韓国・光州のアジアカルチャーセンター研究員、香港理工大学ポストドクトラルフェロー、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科助教、金沢美術工芸大学美術工芸学部美術科芸術学専攻講師を経て、2024年より現職。著書に『現代美術史 欧米、日本、トランスナショナル』（中央

公論新社、2019)、『レイシズムを考える』(共著、共和国、2021)、『ポスト人新世の芸術』(美術出版社、2022)、『この国(近代日本)の芸術——〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』(小田原のどかとの共編著、月曜社、2023) など。



Season Lao Une pièce vide devient blanche pour l'illumination, 2023

France, English, Chinese, Japanese | ISBN : 9784865283815

Musée départemental des arts asiatiques

Adrien Bossard, Noritaka Tange, Hsin-Tien Liao, Koju Takahashi

[Musée Guimet](#) | [Musée Cernuschi](#) | [The Metropolitan Museum of Art](#) | [国立新美術館](#) | [Princeton University](#)